

News Release

大阪から世界へ発信する地球環境へのメッセージ 関西クリエイター45組が自然との共生をバードハウスで表現

～安藤忠雄をはじめ世界のトップクリエイター18組の作品も同時展示～

クリエイター支援施設「クリエイティブネットワークセンター大阪 メビック扇町」(所在地:大阪市北区 所長:堂野 智史)は、11月22日(金)～12月1日(日)に『2013 クリエイターがつくるバードハウス展』を開催、初日となる11月22日には、出展クリエイターと交流を深めながら、作品を鑑賞できるオープニングレセプションを開催します。

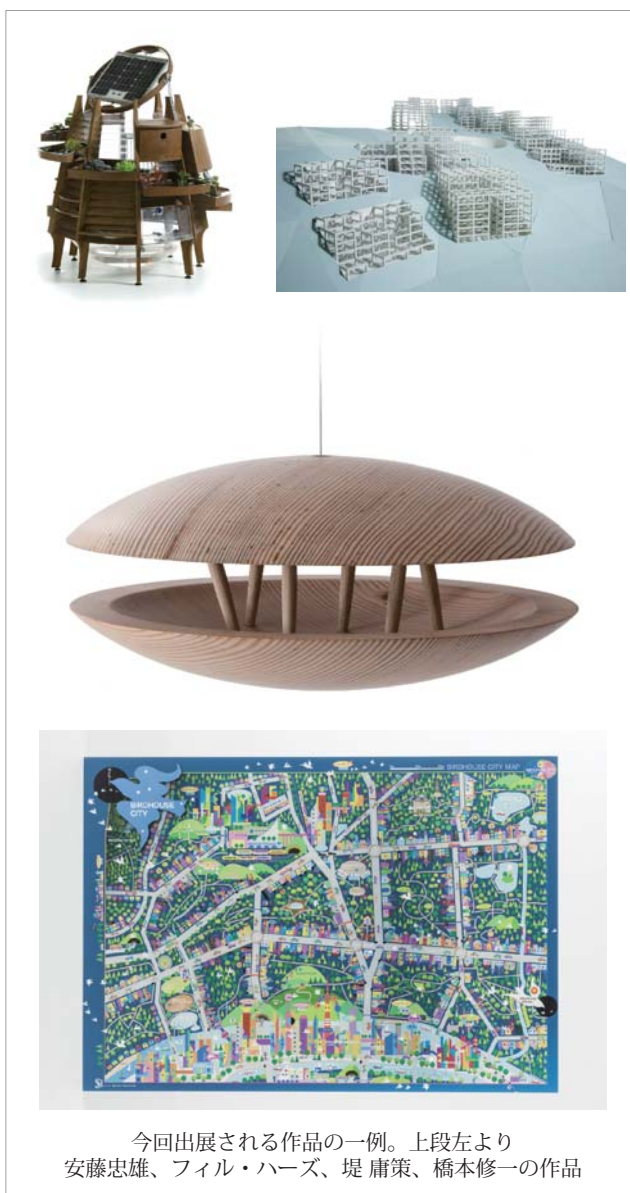
自然と共生する地球環境のありかたをバードハウスで表現する同展覧会の作品は、これまで 立体が中心でした。しかし今回は、グラフィック・イラストから映像・CG作品まで、幅広い作品が揃う初の展示会です。国内外で大規模災害が多発するなか、日本人一人ひとりが地球の未来環境を考える気運づくりに、関西のクリエイティブ力が役立てばと考えています。

『バードハウス展』とは、地球を人に身近な“鳥の巣箱”に置き換えて表現することで、多くの人々に環境保全を考えてもらうプロジェクトです。共催のNPO法人「バードハウスプロジェクト」(所在地:大阪市西区)が、約20年前から世界で活躍するクリエイターに作品制作を依頼し、世界各地で展覧会を開催してきました。その過去の作品の一部は今回も展示されます。

メビック扇町は、28回目となる同展覧会に主催側として初めて参加。クリエイター支援施設として活動10周年を迎えるにあたり、世界を舞台に展開する本プロジェクトに関わることで、関西のクリエイティブ力を世界に発信したいと考えています。

NASA や自動車メーカーの設計者も作品を出展

今回は新作45点が出展。堤 庸策(建築家)の『aida』は、屋根と床の“間”に人も鳥も使える空“間”を生み出した立体作品。橋本修一(グラフィックデザイナー)の『バードハウス・シティ・マップ』は、鳥が人間のように暮らすバードハウスが集まった街を描いたグラフィック作品です。一方で、過去に出展された世界的クリエイターの作品も展示。宇宙デザイナーフィル・ハーズ(アメリカNASA)の、太陽エネルギーを使って生態系を作る循環型のバードハウスのほか、建築家の安藤忠雄、自動車メーカー設計者アルファロメオ(イタリア)の作品など18点が並びます。



今回出展される作品の一例。上段左より
安藤忠雄、フィル・ハーズ、堤 庸策、橋本修一の作品

参考資料

■バードハウスプロジェクトとは

1993年に日本で発足した「NPO法人バードハウスプロジェクト」がスタートしたプロジェクト。バードハウス(巣箱)という小さな住空間を通じて、私たちの「すみか」である地球の未来を考えるプロジェクトです。世界で活躍するアーティストやクリエイターに制作を依頼し、その作品を通じて、地球環境のあり方を考えることを目的にしています。

各地の自治体の支援のもと、公共施設を中心に「バードハウス展」を開催。地元のクリエイターや子どもたちにも参加を呼び掛けることで、バードハウスを作ることを通じて、未来環境を考える場を作っています。またバードハウスカフェやワークショップ、東日本大震災の復興支援活動などもおこなっています。



■オープニングレセプション概要

展覧会初日に立食形式のレセプションを開催します。

どなたでも参加でき、報道関係の皆様取材も歓迎いたします。

日時:2013年11月22日(金) 18:00~21:30

場所:メビック扇町 交流スペース3

参加費:1,000円 / 定員:80人

■ギャラリートーク1 「バードハウス誕生から現在まで・・・そして未来へ！」

バードハウスプロジェクト総合プロデューサーの芳野大樹氏がバードハウスプロジェクトのコンセプトや目指すところ、また世界のクリエイターがつくったバードハウスについて話します。

日時:2013年11月23日(土) 15:00~16:30

場所:メビック扇町 交流スペース3 参加費:無料(要申込) / 定員:50人

■ギャラリートーク2 「出展クリエイター プレゼンテーション」

出展クリエイター6組が、作品制作にまつわる思いや制作過程での面白さや苦労、エピソードなどを話します。

日時:2013年11月24日(日) 15:00~17:00

場所:メビック扇町 交流スペース3 参加費:無料(申込不要) / 定員:80人

■トーク&参加型ライブペインティング「黒田征太郎の世界」

バードハウスプロジェクトのロゴの制作者、アートディレクターの黒田征太郎氏を迎え、クリエイターがつくるバードハウスの世界、地球や社会に対してクリエイターが果たすべき役割など、クリエイティブに対する世界観について話します。当日は黒田さんとともにライブペインティングに参加していただける時間も設けます。

日時:2013年11月28日(木) 18:30~21:00

場所:メビック扇町 交流スペース3 参加費:無料(要申込) / 定員:80人

※詳細はメビック扇町ウェブサイトで <http://www.mebic.com/birdhouse/>

本件に関するメディアからのお問い合わせ先

クリエイティブネットワークセンター大阪 メビック扇町

広報担当:松井

〒530-0025 大阪市北区扇町2-1-7 関テレ扇町スクエア3F

TEL:06-6316-8780(平日10:00~21:30)

FAX:06-6316-8781

e-mail:info@mebic.com

ホームページ: <http://www.mebic.com/>

■フィル・ハーズ Phil Hawes (アメリカ)

1934年中米イリノイ州に生まれる。ごく普通の子供時代、フランク・ロイド・ライトの弟子。ブルース・ゴッフ、絵、彫刻、宝石、町及び地域計画、建築家、ビル建設者、煉瓦づくりの家、鉄筋セメントの舟、ジョン・エイリアン「科学者、アーティスト、冒険家になるために努力せよ」カウボーイ、農夫、船乗り、800km単独トレッキング、バイオスフィア2の建築責任者、教師及びコンサルタント。

フィルのバードハウスは、伝書鳩のためのもの。伝書鳩は何マイルも離れたところへ手紙を運び、疲れて帰って来るから、ゆっくり休ませてあげたいからなんだ。バードハウスのなかで休むハトの止まり木の下には水槽があって、そこに落ちたフンは、プランクトンを育て魚の餌になります。水はいつも浄化されるよう、太陽のエネルギーを使ってポンプを動かします。つまり、このなかでひとつの生態系をつくっているんだ。友だちのための、ゲストハウスもあるんだよ。



■安藤忠雄 (日本)

1941年大阪に生まれる。1985年に日本人で初めて、フィンランド建築家協会よりアルバ・アアルト賞を受賞。1989年、フランス建築アカデミー賞、ゴールドメダル受賞、またデンマークのカールスベルグ賞の第1回に選ばれる。その他受賞多数。最近の作品に1992年セヴィリア万博日本政府館、直島コンテンポラリーアートミュージアムがある。

「バードハウス」は昔から、農業上、害虫駆除のため、鳥を拘束、利用するために作られたものでした。もともと鳥自身のために作られたものではありません。ここにおかれた「バードハウス」は鳥たちのために用意しました。この作品を見て想像してみてください。単純なジャングルジムのような立体格子でできています。このバードハウスの寸法はあなたが自由にきめていいのです。その自由な発想が、鳥達を自由にします。やがて鳥達はこの「バードハウス」に集まり、その中を自由に飛び交います。そして、自由を求めて、また大空へと飛び立っていくでしょう。

■堤庸策 arbol 建築家

『aida』

鳥の巣のイメージと言えば木の枝で作られたお皿みたいな巣か、木を掘って中が空洞になっている巣が連想されます。

その『間』のようなものはどんな巣だろう？

もし人の感性がある鳥がいたとしたらどうだろう？

スケールの大小で鳥も人『間』も使える空『間』は出来ないだろうか？

そんな思いで『シンプルで且つ温かみを』テーマに、デザインしました。

床と屋根の『間』のスリットから360度パノラマで景色を楽しめて、どこからも入り出来る場、奥にいく程プライバシーが保てて落ち着いた雰囲気になる。

仲間が集える場、土『間』のような空間になってくれたらと願います。

デザイン arbol 堤庸策

製作 居七十七 野沢裕樹

材料 黒松 島根県 隠岐島木材業製材業(協)ウッドヒル隠岐



■橋本修一 CATBOX-X グラフィックデザイナー

『バードハウスシティ・マップ / Birdhouse City Map』

バードハウスが集まって街が出来ました。鳥が人間の様に暮らすなら、どんな街に住むだろうか？ そんな事を考えながら地図を描くのは刺激的です。鳥は都会の便利さと自然の安らぎのどちらも犠牲にしません。バードハウスの出入口から都会と自然の両方の世界が広がります。高層バードハウスエリアには駅、店舗、ホテル、ビジネスや文化施設が集り、私たちの暮らす街によく似ていますが、山や森が隣接しています。山頂へ行く Gondola、川辺にはビーチやヨットハーバーなど自然リゾートとビジネスが融合するエリアです。バードハウスは車やバスの移動に便利な幹線道路に沿って並び、高速道路や鉄道は地下で隣接する街へつながります。バードハウスに囲まれた内側は山と渓谷、森と湖の広がる自然エリアです。バードハウスシティは現存する街の平行ワールドのようです。